

日本音楽学会国際研究奨励金受領者報告書

牧野 環

1. 発表学会について

“Chant and Culture”The 8th Annual Colloquium of the Gregorian Institute of Canada

第8回カナダ・グレゴリオ聖歌学会「聖歌と文化」 2013年8月6日-9日

University of British Columbia, Vancouver (BC)

ブリティッシュ・コロンビア大学バンクーバー・キャンパス (カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州)

今回、研究発表させていただいたのは上記の学会で、本部はカナダのオンタリオ州にあり、カナダ国内の毎年違う都市で年1回行われる。カナダ・アメリカでは知名度が高い。参加者とスタッフは、カナダ・アメリカ全土、イギリスからも来られる。学会の公用語は英語で、プログラムは英仏2ヵ国語が併記され、発表も2ヵ国語で可能である。6日の昼食会の後、午後から始まり、研究発表とワークショップが同時進行で行われた。ワークショップでは、グレゴリオ聖歌を歌う。全部で9つのセッションとワークショップが行われた。セッションは、ジャンル別に分かれており、発表者は全部で19人、発表時間20分、質疑応答10分である。基調講演が4つ、ワークショップで練習した聖歌を歌うチャペルでの祈りの時間が1日1回あった。最終日には1時間の総会が持たれた。

2. 研究発表について

8月7日(水) 11:15~11:45 UBC: Buchanan Tower room 826 ブーチャナン・タワー 826室

Papers - SessionIV : Chant in the Renaissance 研究発表セッションIV ルネサンス時代の聖歌 (発表者2名)

発表タイトル“Thomas Tallis’s Cantus Firmus Paraphrase Technique: A Means of Enriching Catholic Culture During the Reign of Mary I “

「トマス・タリスの定旋律技法：メアリー1世時代のカトリック文化を豪華にしたもの」

[要旨] 英国国教会創成期の教会音楽家トマス・タリス(1505~1585)は、15世紀から16世紀の多くのヨーロッパの作曲家がそうしたように、単旋律聖歌のパラフレーズをししば行った。用いられている聖歌は、当時のイングランドの典礼で歌われていた、グレゴリオ聖歌の一ヴァリエーションであるセーラム聖歌である。私は、先行研究に沿って、自ら行った作曲年代の特定に基づき、タリスのメアリー朝(~1558年)までの作品に表れる元の聖歌のメロディを特定し、その出典を明らかにした。これは、非常に時間のかかる困難な作業である。出典の多くは、発表学会であるカナダ・グレゴリオ聖歌学会が作成してい

るセーラム聖歌集のウェブサイト sarum-chant.ca (2006年～作成中) に依る。そして、それらの聖歌がどのようにパラフレーズされているのか、その技法を考察した。分析の結果、10通りの定旋律技法のパターンを見出した。本発表では、それらのパターン一つ一つについて、譜例を用いて、セーラム聖歌とそれを用いたタリスの作品を並べて見比べ、自身で聖歌とタリスの作品を歌いながら、説明した。(本発表の後、スパークスの定旋律技法の分類を用いて、私のオリジナルの新たな分類法と分析方法を確立し、聖歌の楽曲構造に関わる定旋律技法のパターンを見出すとともに、定旋律技法の歌詞との関連を見出して、11月2日の日本音楽学会全国大会において発表した。8月の段階では、10通りのパターンの分類のみであった。)

2. 質疑、感想と反響

発表者は、2週間前までに完全原稿を送れということだったので、送った後、大会委員長の Chantal Phan シャンタル・ファン教授(UBC)から「あなたの原稿は大変興味深い。」という返事が来た。プログラムが完成したという知らせを受けたのは出発の前日の夜で、88ページもの長いプログラムを、時計を見ながらプリント・アウトして、飛行機の中で見るという慌ただしさだった。よってぎりぎりまで内容がわからなかった。初日に、まずワークショップに出て、大家の指導によりグレゴリオ聖歌を歌った。その日に行われたハーバード大学のドクターの学生の研究発表は、グレゴリオ聖歌のソースに関するもので、アメリカの音楽学のレベルを見たような気がした。

翌7日が私の発表だった。始まる前、司会でアメリカからいらした Deborah Kauffman デボラ・カウフマン氏に、ここへ来る前はアメリカにいたのかと聞かれ、ずっと日本にいたと言うと、初めてカナダへ来たのかと驚かれた。時間は十分あり、前の発表者がまだ席にいるのに、「次の発表者を紹介します。Tamaki Makino・・・」と始まった。発表を終え、ディスカッション・タイムになった。全員の発表を見ていた委員長のファン氏が、にこにこしながら、私に気を遣ってゆっくりと「音楽学において、paraphrase 言い換え、citation 引用, borrowing 借用, contrafacta 替え歌, imitation 模倣、などの用語は、どのように区別して用いるのだろうか。あなたはなぜ、いろいろな可能性の中から特に paraphrase という言葉を使ったのか。すべての例を paraphrase と呼ぶのは問題だ。ディスカッションしましょう、あなたは何を paraphrase と呼び、何を citation と呼び、何を borrowing と呼ぶのか・・・」と言われた。長い大きな質問だった。私は、用意してあったパラフレーズについての定義を読み上げたのだが、カウフマン氏が質問をもう一度簡単に繰り返された。それで再度回答を試み、「それは難しい問題です。あるときは『借用』であり、あるときは『パラフレーズ』なのですが、この場合は聖歌を使っているので、『パラフレーズ』という言葉は私は使いたかったのです。例えば、ヘンデルの借用は『借用』なのですが、この場合は違うのです。」という趣旨のことを答えた。私の話に相槌を入れながら聞いてくださっていたカウフマン氏は深くうなずき、「ヘンデルの借用は、すべて

の素材を使っている。」と言われた。その後、別の方が発言された。「多くの音が入っていたり、元の形が変わっている場合は『借用』ではないだろうか。」という意見だった。一つの話題だけでディスカッション・タイムは終わった。これほど充実した質疑応答は、これまで経験がなかった。なごやかで笑い声も起こった。ここに来られて幸せだと思った。つい先日まで、畑の開墾などして生計を立てていたことを思うと夢のようだった。温かいカウフマン氏の気配りに感謝である。

このディスカッションの録音を、帰国後、あるアメリカ人に聞いてもらった。ファン氏は、質問の冒頭、フランス語で話した。英語の発表には英語で質問するのが学会の常識であるので、不思議に思っていた。ファン氏が、**paraphrase** をフランス語で発音したのは聞き取れたが、**citation** もフランス語の発音で、彼女にはケベック・フランス語の訛りがある、黄色人種のファン氏は、フランス語がネイティブだ、彼女はフランス語で考えているという。彼女は明言していないが、「**citation** と **paraphrase** を使うべきだ」という考えだという。二語ともフランス語と英語の意味は同じである。なぜフランス語だったのだろうか。ファン氏は、おそらく意識的にフランス語を使った。ネイティブの言葉で、自分の本音を話すためだ。その場にいた人達の多くは、ファン氏はフランス語がネイティブだということを知っているから、彼女の意図がわかる。英語もおぼつかない私は当惑した。単一言語、単一民族の日本とは違う国際学会というものを教えられた。

私の発表の次に行われた基調講演は、**sarum-chant.ca** の編集者である **William Renwick** ウィリアム・レンビック教授のセーラム聖歌についてのお話であった。**sarum-chant.ca** は、カナダ・グレゴリオ聖歌学会の作成中のセーラム聖歌集のウェブサイトで、2006年より発表されている聖歌は2000ページにのぼる。講演の中で「前の発表者の話を興味深く聞いた。私の編集している楽譜が、日本でも活用されていることを嬉しく思う。前の発表者が、セーラム聖歌と **sarum-chant.ca** についての紹介をしてくれた。」と述べられた。そして、こんなものまで見る必要があるのかと思いつながら、遠くの図書館まで足を運んで、ばらばらとめくった本に出ていたオールド・セーラムの写真が、私が見た白黒ではなくカラーでスクリーン上に映し出されるのを見たとき、自分のやっていたことが見当はずれではなかったことを確認すると同時に、日本では活字の上で見ただけで、話題にされることのない話が目の前で繰り広げられていることに感動した。講演後、レンビック氏に挨拶し、今回の発表で取り上げた曲の中で、イギリスとフランスの図書館の蔵書を見たがみつからず、手に入らなかった聖歌の楽譜が、どこにありますかと尋ねた。お会いしたら聞くつもりだった。すると彼は、「（発表の中で）《**Alleluia ora pro nobis**》が手に入らなかったと言っていたね。楽譜をメールで送ってあげよう。」と言ってくれた。翌日、レンビック氏のワークショップに行くと笑顔で、「**Hello, how are you?**」と声をかけられた。そのワークショップは、ローマ典礼聖歌とセーラム聖歌を比較するもので、私にとって非常に有意義であった。説明を聞き、歌った。レンビック氏はヴォイス・トレーニングのよくできた声で歌も上手だった。オルガニストでもある。休憩時間に、前日の私の発表について

個人的に話された。「パターンの分類は明瞭だ。よくできている。質問がある。きのうのあなたの説明は、**citation** と **paraphrase** の区別がはっきりしなかった。」と言われた。彼はこの二語を使うことを、勧めたのだった。その翌日、特別販売で CD と本を買おうと、すかさず近寄り、「Hey, Tamaki, 何を買ったの？」と聞かれた。名前を覚えていただいて嬉しかった。ローマ典礼聖歌に関する発表ばかりで、セーラム聖歌を取り上げたのは私一人であり、カトリックの人が大半で、彼と私は数少ないアングリカン（聖公会）だった。

他に「あなたの発表を聞いた。よかった。」と話しかけてきた人は、カトリックの教会で聖歌隊の指揮をしている。どうしてタリスの研究をしているのか、タリスの曲をやりたいが何がいいだろうか、日本のアングリカンは **Book of common prayer**（英国国教会祈祷書）を使っているのか、東京にグレゴリオ聖歌のミサをやっている教会があるのか、等いろいろと聞かれた。日本の教会では何も聞かれないので、レベルの高さを実感した。

3日目の夜、パーティーがあった。ハーバードのドクターの人と話して、読むべき本を教えてもらった。あるアメリカ人の方に「日本ではグレゴリオ聖歌をしんみりとまじめに歌っているが、こちらでは、生き生きと楽しそうに歌っている。どちらがいいのでしょうか。」と尋ねた。すると「いろいろなグループがあり、いろいろな歌い方がある。まじめに歌うところもあれば、楽しく歌うところもある。我々は、大きな声で楽しく輝かしく歌う。どんな歌い方がいいのか、日本に帰ったらぜひディスカッションして欲しい。」と答えられた。「Yes.」と言いつつ、日本に帰ったらディスカッションどころではないなと内心思った。日本びいきの **Walter Kreyszig** 教授は、2002年の静岡での国際大会で発表したと話された。「シズカ（静岡）に、あなたはいたか？」「日本人の学者を知っているぞ。ヒグチ、カナザワ」「カナザワとはハーバードの同級生だった。彼は今どうしている？」と言われた。彼がコンサートで行ったという日本の地名をあてるために、回りの人と数人で盛り上がった。かつてない楽しい時間だった。行きはファン氏とカウフマン氏、帰りはカウフマン氏といっしょにバスで **UBC** まで帰った。カウフマン氏に日頃の悩みを聞いてもらった。

学会の前後に、研究の一環として、**Christ Church** クライスト・チャーチ（聖公会）、**Holy Rosary Cathedral** ホーリー・ロザリー教会（カトリック）、カナダ・グレゴリオ聖歌学会推薦の **Holy Family Parish** ホーリー・ファミリー・パリッシュ（カトリック）の礼拝・ミサに出席した。クライスト・チャーチでは、発表で取り上げるセーラム聖歌が歌われていたので、そのことを原稿に加えた。また、トランペット管のオルガンの響きを聴いたが、聖歌の同じ節の中で、瞬時にレジストレーションを変えるというテキスト・ペインティングの妙技をやっていた。試してみようと思った。クライスト・チャーチでは、8月7日に、日本聖公会中部教区の渋沢主教が訪問されたと記録されていた。**UBC** では、同時期に「バンクーバー古楽講習会」が開かれており、学会参加者は、中世音楽講習会の一部を見学できた。コンサートや講演会、ハーブシコードやバロック・ダンスのレッスンも見た。

帰国すると、レンビック氏からの楽譜のメールが届いていた。「あなたに会えてうれし

かった。楽譜を送ります。役に立ちますように。」と書かれていた。3日後、2回めに送られてきたのは、彼が校訂した《Alleluya ora pro nobis》のきれいな現代譜だった。これは、私へのプレゼントで、彼は私のためにこの楽譜の校訂をすぐにやってくれたのだ。この楽譜は、まだ出版されていないもので、sarum-chant.caには出ていない。私は、「この楽譜は、日本音楽学会の次の発表で使います。あなたの御親切を、日本音楽学会への報告書に書きます。」と返事を書いた。すると、「その報告書のコピーを見たい。」という返事が来た。

ファン氏をはじめ、係の皆様のおかげで、初心者の方に居心地のよい学会だった。世界的名所である美しい UBC のキャンパスと、帰りの出発ぎりぎりまで図書館で過ごした時間、人類学博物館の見学、出会った善意の人々、何もかも印象深かった。人生最高の思い出として大切にしたい。

実り多い学会へ行くことを援助して下さった日本音楽学会と、住友生命保険相互会社に、お礼を申し上げます。

(この報告書は、英訳してレンビック氏に送った。)